

F-28 遊ぶを中心とする児童の生活実態—学童保育についての総合研究 (5)
長崎女子短大。松尾悦子。向井喜代。有田敏子。豆田妙子 他5名

目的 (1)と同じ。特に児童の遊び場、学童保育施設づくりのために、学習、遊び、けいこごとなどの面から児童が放課後どのように生活しているかの現状を明らかにすることを目的とする。

方法 (1)、(2)に同じ。

結果 本調査の結果、小学生児童は多人数で広い場所を走りまわって遊ぶ遊び(自転車、やきゅう、サッカー、ドッチボールなど)を非常に好んでいることがわかった。特に高学年男子ではこの要求が強い。ところが実際に遊んでいる場所を見ると多くの子供が、家の中、庭、自宅前の道路などとなっており、どうも子供の欲する遊びはできず、家の中での一人遊びが高い比率を占めており、テレビ視聴時間も予想以上に長い。この状態は児童の遊びの欲求が満たされていないことを示している。この点は児童の学外生活での大きな問題である。

次に、けいこごとを見ると、高学年になるほど何らかのけいこごとをしている。特に習字、そろばんなどが多くけいこされている。学習塾に通っている児童は低学年ではあまり見られないが、高学年ではかなり多い。

また、けいこごとに通う日数も週6日という非常に多いものもあり、伸び伸びと遊ぶべき発育盛りの放課後生活のあり方として問題であろう。